

熊本復興支援活動 避難所支援報告



この度は、熊本復興支援活動に参加する機会をいただき、心より感謝申し上げます。また、急な日程での呼びかけにも関わらず、毛布やブランケットのご寄付をはじめ多大なるご協力をいただいた皆様に、深く御礼申し上げます。

9月20日～23日の4日間、ウエルネススポーツセンタースタッフ8名が現地での支援に入らせていただきました。出発にあたり募集いたしました毛布・ブランケットは合わせて約60枚が集まり、無事に熊本YMCAへ寄付させていただきました。皆様の温かいご支援に重ねて感謝申し上げます。

現在、熊本では八代地区にある「八代トヨオカ地建アリーナ」と「鏡コミュニティセンター」の2箇所で避難所運営が行われており、私は八代トヨオカ地建アリーナの支援を担当いたしました。

現地は本震から約2ヶ月が経過し、長期化する避難生活の課題が見える状況でした。支援期間中、シルバーウィークに合わせて「大掃除大作戦」が実施され、これまで使用していた段ボールベッドが並んでいるスペースから、プライベート空間を確保できる「仮設テント」への引っ越し・再配置計画が進められました。

引っ越し先の決定にあたっては、医療班の看護師の方々がこれまでの経過情報をもとに、避難者の健康状態や周りとの人間関係・配慮事項を踏まえてきめ細かくレイアウトを行っていました。

今回の再配置では仮設テントによる仕切りがベースとなっていました。仕切りを望まない方や、ご家族ごとにカーテンで大きめに区切りたい方など、個別のご要望も多くありました。一律に管理する方が作業自体は容易ですが、避難者一人ひとりの気持ちや生活に徹底して寄り添うYMCAの姿勢を強く感じました。

また、今回の活動は YMCA 単独ではなく、熊本南病院、日本赤十字社、JMAT、DWAT をはじめとする多様な団体の協力があったからこそ、大きな混乱もなく完了できたのだと感じます。運営当初から他団体との強い信頼関係を築いてこられた丸目施設長をはじめ、全国の YMCA スタッフの日々の積み重ねが大きな成果となって現れていました。

広島から参加した私たちが携わったのは、長い避難所運営のなかのわずか4日間に過ぎません。しかし、スタッフ一人ひとりが避難者の方々に寄り添い、「自分に何ができるか」を考えながらひたむきに動き回る姿は大変頼もしく、多くの学びを得ることができました。

支援活動の期間延長が予定される中、機会があればぜひ再び現地での支援に参加させていただきたいと考えております。同時に、今回の毛布支援のように「広島からできる継続的な支援」についても検討を進めてまいります。

改めまして、このような貴重な支援の機会をいただいたこと、そして活動を支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。

中央・ウエルネス 統括 野々上隆之

9月20日から23日までの4日間、ウエルネススポーツセンターのスタッフ8名が、熊本県八代市の避難所支援に参加させていただきました。今回の支援にあたり、出発直前に「毛布・ブランケットを届けたい」と皆様に呼びかけたところ、急なお願いにもかかわらず、多くの方々から温かいご協力をいただきました。皆様から託していただいた毛布やブランケットは、熊本 YMCA を通じて現地へ届けることができました。ご協力くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

現在、八代地区では、八代トヨオカ地建アリーナと鏡コミュニティセンターの2か所で避難所運営が行われており、私は鏡コミュニティセンターを担当しました。鏡コミュニティセンターには、約40世帯、60名の方々が避難されていました。避難生活を送りながらも、朝早くから仕事へ出かけ、夜遅くに戻ってこられる方もいらっしゃいました。避難所の運営は、Japan Heart、DWAT（災害派遣福祉チーム）の皆さんと協力して行われていました。また、各地から来られた炊き出し団体や、他県から派遣された県警の方々による巡回など、多くの方がそれぞれの立場から被災された方々を支えていました。私たちも避難所運営のお手伝いをするとともに、避難されている皆さんと一緒に体操を行いました。短い時間ではありましたが、身体を動かしたり会話をしたりする中で、少しでも気分転換の時間になっていればと思います。

現地で強く感じたのは、ライフラインが少しずつ復旧していても、被災された方々の生活が元の日常に戻るまでには、まだまだ時間がかかるということです。避難所での生活が終わった後も、住まいや仕事など、生活の再建にはさまざまな課題が残ります。今回の活動を通して、災害支援は現地で活動する人だけで成り立つものではないことも改めて感じました。行政、医療・福祉関係者、警察、炊き出し団体、ボランティア、そして遠くから物資や募金を届ける方々。多くの人の思いと力がつながることで、一つの支援になっていました。そして、熊本だけではなく、日本各地、さらには世界にも、災害や貧困、紛争などによって支援を必要としている人たちがたくさんいます。私たち一人ひとりにできることは、決して大きなことばかりではありません。募金や物資の支援、現地に足を運ぶこと、誰かを気にかけること。その一つひとつが、誰かを支える力になるのだと思います。

今回の経験を一度きりの活動に終わらせることなく、これからも私たちにできることを考え、できることから行動していきたいと思います。今後も支援の機会がありましたら、皆様にもご協力をお願いすることがあるかと思っています。その際には、ぜひ温かいお気持ちをお寄せいただければ幸いです。被災された皆様が一日も早く穏やかな日常を取り戻されることを願うとともに、今回ご協力いただいたすべての皆様に、改めて心より感謝申し上げます。

中央・ウエルネス部長 岡田 敏揮

4 日間にわたる熊本地震の避難所支援活動を通して、多くの被災者の方々との出会いがあり、支援の在り方について深い学びを得ることができました。

活動当初は、日々の何気ない会話を重ねることを意識し、少しずつ避難されている方々との信頼関係を築いていきました。対話を重ねる中で、一人ひとりが多様で複雑な思いを抱えながら避難生活を送っていることを痛感いたしました。



今回の活動を通じて、単なる物資や作業の支援にとどまらず、「傍らで話を聴き、心から寄り添い、思いやる姿勢」がいかに重要であるかを学びました。最終日には多くの方々と名残惜しくお別れをすることとなり、支援者と被災者という枠を超えたかけがえのない時間を共有できたと感じております。

ご協力いただいた皆様、そして温かく受け入れてくださった避難所の皆様との出会いに深く感謝申し上げます。今回の学びと出会いを決して風化させることなく、今後も継続的な支援活動や熊本への訪問を続けてまいります。

中央・ウエルネス 野外マネージャー 國吉 香澄

令和 8 年 9 月 20 日から 23 日にかけて、熊本県八代市にて復興支援活動に従事いたしました。市内はライフラインや幹線道路の復旧が進みつつある一方で、住宅地には倒壊した家屋が依然として数多く残されており、避難所では未だ多くの方々が不便な避難生活を余儀なくされている現状を目の当たりにしました。

現地での支援内容は、避難所での物資の搬入や配給の補助、清掃、見回りなど多岐にわたりました。特に 2 日目に実施した居住スペースの配置換えをはじめ、あらゆる作業にやりがいを感じるとともに、被災された方々から多くの感謝の言葉をいただきました。また、現場は YMCA のみならず、熊本県内外から集まった数多くの支援者が連携し、協力し合いながら避難所が運営されていました。



今回の活動を通して最も重要だと感じたのは、「被災された方々の声に耳を傾けること」です。これは、私たちが現地に到着した際、最初に丸目所長からいただいた言葉でもありました。些細なことでもじっくりとお話を伺い、心の整理をお手伝いしながら、自立へ向かうその日まで支え、寄り添い続けること。物質的な支援はもちろん不可欠ですが、それ以上に「人と人との繋がり」こそが大きな支えとなります。そしてこれこそが、まさに YMCA の理念であり、私が YMCA に入職した際に先輩から最初に教わった原点であることを、今回の支援活動を通じて改めて深く胸に刻みました。

街並みが少しずつ本来の姿を取り戻しつつある中でも、被災された方々お一人おひとりにとっての「本当の復興」には、まだ長い時間と温かい支援が欠かせません。「愛と奉仕」という YMCA のキリスト教精神のもと、広島 YMCA はこれからも熊本の皆様と共に祈り、心を合わせた支援活動を続けてまいります。

中央・ウエルネス 成人マネージャー 吉田 悠一郎



この度は、熊本での復興支援活動に参加させていただく機会を賜り、心より感謝申し上げます。活動中、避難所であるアリーナの模様替えを行いました。作業前より、配置変更に伴うご意見や混乱（トラブル）が発生する可能性が想定されていましたが、実際の作業後にも住民の方からのご意見をいただきました。ご意見に真摯に対応させていただき、翌日にはその方が笑顔でご挨拶をしてくださいました。自分の対応が完全に正解であったかはわかりませんが、その笑顔を通じて、一人の避難者様が抱えていた不安や不満を少しでも和らげることができたのではないかと実感いたしました。

また、共に活動した支援チームの皆様の対応力にも強く心を打たれました。避難者の方々がそれぞれ抱える不安や課題に対して、多様なアイデアや工夫、臨機応変な対応で一つひとつ丁寧に解決へと導いていく姿は、大変勉強になりました。

現地では、外部からの支援者である私たちに対し、被災者の方々が「お疲れ様です」「ありがとうございます」と温かく声をかけてくださいました。支援をする立場として熊本を訪れましたが、むしろ住民の皆様の温かさや笑顔、そして前を向く強さから、こちらが大きなパワーと励ましをいただく日々となりました。

被災された皆様が一日でも早く穏やかな『日常』を取り戻せるよう、今回の現地活動で得た気付きと感謝を胸に、今後も支援活動を続けてまいります。貴重な機会をくださった関係者の皆様に、改めて深く御礼申し上げます。

中央・ウエルネス 内川 遥

令和8年熊本地震の被災地支援として、八代市鏡地区の鏡コミュニティセンター避難所運営に4日間従事いたしました。現場で過ごした時間は短期間ではありましたが、避難所運営のあり方や支援の難しさ、そして「これからの支援の継続性」について深く考えさせられる貴重な機会となりました。

私が支援に入った避難所は、自宅が全壊・半壊し帰宅の目途が立たない後期高齢者の方が大半を占めていました。その中で最も印象深かったのは、「出口を見据えた自立支援」の重要性です。単に支援側が支援を行うだけでなく、入所者が食事の配膳・片付け、清掃など「できることはご自身で行っていただく」運用がなされていました。避難所生活の先にある仮設住宅等への移転後を見据え、自立した暮らしの感覚を保ち続けていただくための働きかけの大切さを痛感いたしました。

一方で、在宅避難者に向けた支援物資の配布業務においては、支援の難しさと葛藤に直面しました。公平性を保つため個数制限を設けて配布を行いましたが、周辺のライフラインが復旧しつつある中でも連日多くの方が来られました。目の前の対応に追われながらも、「本当に困窮している方は、この配布場所にすら辿り着けていないのではないか」という強いもどかしさを抱えながらの活動となりました。

今回の支援を通じて強く感じたのは、ライフラインが復旧し始めてもなお、住まいを失った方々の生活再建には長い道のりが続くということです。自立に向けた「出口支援」を確かなものにし、現場の手が届きにくい方々にまで支援を届けるためには、現場での活動のみならず、外部からの継続的な災害募金や必要な物資の支援が不可欠です。

復興はまだ始まったばかりです。被災された方々が一日も早く穏やかな日常を取り戻し、次のステップへと踏み出せるよう、私自身も微力ながら支援を続けるとともに、皆様からの温かいご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

中央・ウエルネス 日高 結子



テレビの報道などを見て、熊本の被災された方々のために何かお手伝いをしたいと思っていたので、今回このような支援の機会をいただけたことを嬉しく思います。

実際に現地に入り、支援活動をさせていただく中で、テントで生活されている方や、段ボールベッドを使用して生活されている方々の様子を直接見ることができました。テレビを通して見るのと、実際に現地に足を運んで自分の目で見るとでは感じ方が大きく違い、被災された方々が今どのような環境で生活されているのかを知る貴重な経験になりました。

今回、少しでもお手伝いすることができて良かったです。この経験を通して、困っている方のために自分にできることを考え、行動することの大切さを改めて感じました。

中央・ウエルネス 保井 茉萌



まずはじめに、大変貴重な熊本復興支援活動の機会を設けていただきました関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

今回の経験は自身の視野を大いに広げるものとなり、今後の成長に向けた明確な糧となりました。以下にその経験を記述いたします。

メディア等で熊本に地震が起こったことは承知していましたが、実際現場に行ってみるとメディアで見るよりも壮絶なものがありました。地盤が押し上げられ、波のような形の道路、倒壊している家やお墓の姿があり、その中でも外観にダメージのない家もあり、車の中から見た景色に胸が締めつけられるような思いと、違和感があったのを覚えています。

私は鏡コミュニティセンターでの支援をサポートさせていただきました。

最初に、お弁当のゴミの分別をされるご高齢の方の姿が目に入りました。被災された方が率先して働いておられる姿をみて、凄さを感じると共に、自分に出来るかなという疑問もありました。そういった方たちを見て、どこまで介入したら良いのか迷いは沢山ありましたが、出来ることは自分で行なってもらい最終的には避難所を出られるような出口支援を行っていることを聞き、少しずつ日常に戻れるようなサポート、取り組みを行っていることを知りました。

避難された方と日々を過ごす中で、1人の小学一年生の少年とサッカーをする機会がありました。避難所から20分ほど歩いたところに公園があり、道中たわいもない話をしながら向かいました。実際公園でサッカーした時間は5分ほどでしたが、帰りは道を変えて帰ることになり避難所まで帰りました。そこには、行きの道にはなかった倒壊した家がありました。悲しい気持ちになるねと、声をかけると少年は「僕のお家も壊れたんだ」と教えてくれました。その一言にどれだけの勇気と、悲しみが含まれているのかと胸が痛む思いをしました。「今楽しい？」と聞くと大きな声で「うん。」と言ってくれました。こんな強い子を見たことがなく、衝撃を受けました。

私は、現地支援が終わると、当たり前のように帰宅し日常生活を過ごしています。そこで終わってしまうと、ただ体験しただけで終わってしまいます。そうならないためにも、体験を子どもたちに繋いでいくことが大切だなと感じました。

家がある素晴らしさ、家族がいる素晴らしさ、運動や勉強ができる素晴らしさ。一つ一つの想いを噛み締めて、伝えていければと思います。

このような機会を与えてくださり、ありがとうございました。

被災された皆様の安全と、一日も早い復旧、復興を心よりお祈り申し上げます。

中央・ウエルネス 川村 晋平